

令和3年度第2回米子市総合教育会議 概要

■日時

令和4年2月22日（火）午前10時から11時30分

■場所

米子市役所本庁舎4階 401会議室

■議事

- (1) 米子市教育に関する大綱について
- (2) 「米子市教育支援センター（仮称）」について
- (3) 学校現場におけるコロナ対策とアフターコロナに向けて

■出席者

市長 伊木 隆司

教育長 浦林 実

教育委員 白井 靖二

教育委員 上森 英史

教育委員 荒川 陽子

教育委員 三瓶 文乃

■学校関係者

福生東小学校学校長 藤原 敏朗

湊山中学校学校長 足立 祥一

東山中学校学校長 高多 宏樹

■出席職員

総合政策部長 八幡 泰治

総合政策部総合政策課長 川本 陽子

総合政策部総合政策課まちづくり戦略室長 伊藤 昭裕

総合政策部総合政策課まちづくり戦略室係長 安居 利弘

こども総本部長 景山 泰子

教育委員会事務局長兼こども政策課長 松田 展雄

こども相談課長 瀬尻 慎二

こども施設課長 斎木 雅徳

こども支援課長 金川 和弘

学校教育課長 西村 健吾

生涯学習課長 木下 博和
学校給食課長 伊藤 康恵
こども政策課課長補佐 東森 健悟
学校教育課担当課長補佐 平野 勝久

■傍聴者数

2人

■議事（1）米子市教育に関する大綱について

《事務局》

資料に沿って説明。

《伊木市長》

これまでの教育に関する基本方針を踏襲しているが、「学ぶ楽しさのあるまち米子」という部分を追加した。この2年間、コロナ過の影響により子ども達は学びにおける様々な制約を受けている。もしかすると、子ども達にとって学校という場所が面白くない場所、制約ばかりの場所となっており、学ぶ楽しさ、友達と触れ合う楽しさを実現できていないのではないかと考えている。令和4年度以降、子ども達が学校に行って楽しい、行きたいと思える学校づくりを米子市を挙げてやっていきたいと思い、この文言を追加させていただいた。

《白井委員》

「学ぶ楽しさのあるまち」は大切な考え方であり、このような文言が加わったことを大変うれしく思う。この大綱を基に、各現場で子ども達の知的好奇心を満たすような仕掛けづくりを行っていただければと思う。

《荒川委員》

中学校卒業後の子どもの育ちをサポートできるこども総本部が出来たことは心強く、期待している。今後は公民館の在り方も重要になってくる。災害時の避難拠点となることはもちろん、ご高齢の方をはじめ、全世代の人が集まれる場になればと思う。

《上森委員》

行政の横の連携、切れ目のない教育支援体制をこども総本部という形で実現していただいたことに感謝している。米子市全体で教育を進めていく上での拠点となると思う。

《伊木市長》

全市挙げて教育を行うという考えを具現化するために整備した組織であり、これをきっかけに社会全体で子ども達の学び、大人になってからの学びを支えていけるようにしていきたい。

《三瓶委員》

こども総本部が出来たことを大変うれしく思う。今後の5年間はアフターコロナの対応に追われこととなると思うが、こども総本部ができたことにより、福祉と教育が一体となり、様々な対応が可能となることで、大人も含めて我慢ではなく学びを楽しめるようになればいいと期待している。

《藤原校長》

改めて学校現場の責任は重大だと感じている。「学ぶ楽しさ」については、学ぶということがどういうことなのかを改めて問い直したいと思う。楽しさだけを追求するだけではなく、その中に学びがないといけない。子ども達に学ぶ楽しさを如何に感じさせるか、達成感、充実感を持たせるかが大切ではないかと思う。みんなで米子市の子どもを育てていかなければいけないと改めて強く感じた。

《足立校長》

米子の豊かな自然や、歴史、芸術文化と関連付けて学ぶ楽しさを考えさせていきたい。

《高多校長》

近年では福祉と医療、教育との距離が近づいている。そのような状況の中で、こども総本部が設置されて、福祉、医療との連携が機能しやすくなるということは現場にとってもありがたいこと。うまく活用できるようにコーディネートしていかなければいけないと思っている。「学ぶ楽しさ」については、コロナの影響で表現の場が制限されている。生徒の表現の場を確保することで学ぶ楽しさ、伝える楽しさを作っていく必要があると感じている。

《伊木市長》

学校現場の先生方には、こども総本部の職員が学校現場に伺った際には良好なコミュニケーションを取って、受け入れていただけるようお願いしたい。大きく見ると一つの組織での対応となるため、コミュニケーション、連携を取ることで物事は進むと思う。

《浦林教育長》

こども総本部を設置してから、景山部長と日々話をしている。学校への計画訪問には景山部長が、保育園の訪問には私が相互に乗り入れを行っており、今後も更に取り組みを進めていきたいと考えている。大綱については、教育の中で必要とされている要素のバランスがとれており、「学ぶ楽しさのある」という社会情勢を踏まえた米子市としての思いが詰まっているものになっていると感じている。

■ 議事（２）「米子市教育支援センター（仮称）」について

《事務局》

資料に沿って説明。

不登校対策に取り組んでいる東山中学校の高多校長より現在の取り組みについて説明。

《高多校長》

東山中学校の取り組みについては、不登校の子が登校できる教室を用意しており、元校長を指導員として配置し、家庭訪問や学習指導を行っている。現在は1～3年生の約10名が利用しており、設置以降、常時3名程度がこの教室に登校している。勉強の半分はタブレットを活用したもので、eラーニング教材を活用したものや、授業中の教室とつなぎ、リアルタイムで配信された課題を解くことをしている。この教室に来ていてカウンセリングに繋がったケースもある。

担任教諭と指導員が連携して相談する機会も見られ、教員としても安心して生徒に登校させることができる場となっている。実際、1学期登校しなかった生徒数名が登校するようになり、先日の高校入試も受けることができ、進路も決まりつつある。生徒に色々なチャンスの場を与えていただき、それを活用できている状況をありがたく思う。

《伊木市長》

不登校になることが珍しくない状況の中で、学校に行くか行かないかではなく、中間的なステップを踏めるような学びの体制が必要だと考え、教育支援センターの設置を目指していくこととした。児童生徒の多様な背景を可能な限り受け止められるような体制を作っていきたい。

《足立校長》

無理に学校に行く必要はないという保護者の考えがある一方で、学校側としてはそうした子ども達とも関わっていく必要がある。また、学校以外の場所を求めるケースもある。そういった状況の中で、米子市教育支援センターはとても意義があるものだと考えており、非常に期待している。各校に配属されている不登校加配の教員がセンターで授業をする等、米子市全体でこういった取組を進めたいという思いも聞いている。

センターでの取組では、体験活動の充実もお願いしたい。最近では、人との関わりを極力減らしたいという理由から通信制の高校を希望する生徒が増えてきている。義務教育期間の中で人と関わることによって学べることもあるのではないかと考えている。今までは学校へ再登校を促すという目的だったが、なかなか再登校できない子ども達の社会的な自立を学ぶ場を支援センターで実現できればと思う。

《藤原校長》

小学校についても不登校児童が増えており、支援センターに非常に期待している。不登校には、本人に起因する不登校、環境に起因する不登校があると感じている。家庭環境など環境に起因するものについては、保護者の理解が得られないこともあり、市の第三者的な立場から話をしていただけるのは有効かと思う。心配しているのは引きこもってしまう児童。こういった子ども達を何とか外に出して、居場所を1つでも増やし

てあげたい。支援センターは学びの場というよりも、居場所を作るということが根本的な目的だと思うので、まずそこからスタートしていただきたい。可能であれば学校に見えない工夫をしていただきたい。

《上森委員》

不登校の子ども達の様々なケースをフォローすることは学校だけでは難しく、指導員や、スクールソーシャルワーカーの配置、支援センター設置はありがたいと感じている。一方で先生方には、子ども達が楽しく人と触れ合いながら学校に通う体制を基本にもって対応していただきたい。支援シートも活用していただき、まずはしっかり学校に通えるような対応をしていただき、それでも難しい場合は行政としてフォローし、教育支援センター等で対応していければと思う。

《伊木市長》

教育支援センターは「ぷらっとホーム」という名称にさせていただいた。駅のプラットホームは様々な人が行きかう場所であり、どこかへ出発する場所。それに加えて、ぷらっと家庭のような感覚で居場所として使ってほしいという意味でこの名称にした。いきなり学校ではなく、まず第3の居場所として活用していただき、再登校の足掛かりになるような場所となれば。

《三瓶委員》

課題がある家庭が何かあったときにすぐに相談できるため、スクールソーシャルワーカーの増員をうれしく思う。不登校の子ども達は家以外の居場所を探しており、勉強を進めなければという不安も持っているので、様々な選択ができることは子ども達にとって大きなこと。ぷらっとホームは、中学校卒業から成人するまでもぷらっと帰ってこられる居場所になればと思う。

《荒川委員》

スクールソーシャルワーカーの支援、活躍は非常に心強く感じており、教育支援センターができることにも大きな期待をしている。ぷらっとホームでは体験活動を通して自分の好きな何かに出会ってほしい。一人も取り残さない教育を目指している米子市の教育として非常に期待しているところ。

《白井委員》

ぷらっとホームのような場所ができることによって、不登校の子ども達が自分の殻を一つでも二つでも破ることに繋がればと思う。教員や相談員等が子どもの様子を共有することで新たな子ども達の成長のヒントが見つかる。そういった事がぷらっとホームでもできる事を願っている。

《浦林教育長》

就任以来、米子市の全ての子どもを最大限成長させたいという思いで取り組んできた。不登校で苦しんでいる子ども達のために多様な場を設けて、その子達が伸びるチャンスを作っていかなければいけないという思いが今回のセンター設置につながっている。不登校の子どもが学校復帰となっても、学級がその子達をしっかりと受け止める土壌がないと、積み上げたものが十分に活かされない。改めて、ひとりひとりがお互いを尊重し

合い、大切にしよう学校、学級づくりをしていきたい。ぷらっとホームは学校ではないため、PTAがない。これを逆手にとって、米子市民全員にサポーターになってもらえればと思っている。子どもを大切に思っている大人もぷらっと来ていただき、支援をしていただける様な場になればと思う。

■ 議事（３）学校現場におけるコロナ対策とアフターコロナに向けて

《事務局》

資料に沿って説明。

《伊木市長》

様々なコロナに関する対策、自粛が２年にわたり続いているが、もう一度学校を子ども達にとって行きたい場所、楽しい場所にしていきたいと思っている。単に自粛等を解除するだけではなく、アフターケアとして必要な事があればご意見を伺っていきたい。

《足立校長》

PTA 活動も思うように活動できておらず、今年度は機関紙が１、２ 学期合わせたものとなった。その中に、生徒の写真が掲載されていたが、私自身初めてこの子達の顔を見た。入学して２年になるがマスクをつけている顔しか見ていない。おそらく、子ども達も私がマスクをしている顔しか覚えていないと思う。

コロナが収束した際には、改めて行事を見直し、生徒達の声を聞きながら進めていくことが一番良いのではないかと思う。部活動についても十分にできておらず、部活動がない学校生活が当たり前になっている。そうではない事をしっかり伝えながら学校生活を送っていく必要があると考えている。

《藤原先生》

子ども達は順応性が高い。コロナ禍においても積極的に対策、対応してくれている。徐々にアフターコロナに向かっていくこととなるが、子ども達は上手く順応していくと思っている。現状では ICT 等を活用して対応はしているが、対話活動や、協働学習に支障が出ている。今後学習の在り方、みんなで学んでいくことを再構築していく必要があり、みんなでできる良さ、嬉しさ、楽しさを再度学校で作りに上げていく必要があると考えている。

もう一点は保護者との連携が取りにくい現状がある。参観日が中止、行事も見に来ていただけてない状態であり、保護者が何を考え、子ども達、学校に何を期待しているのかが判りにくくなっているため、保護者との連携を再構築する必要があると強く感じている。

《高多先生》

ICT 等コロナによって進んだ面もあるが、子ども達は鬱屈とした思いを持っている。色をつける、匂いをつける、動きをつけるというコンセプトで何かできればと思っている。そういったことが、自分が大事にされているというメッセージになると思う。

《白井委員》

アフターコロナに向けた取組は、コロナ前に 100%戻すことではないと考えている。コロナ禍を契機に新たにしていく部分と、失いかけていることを補う部分があると思う。教員が生徒たちの顔を覚える、生徒同士が顔を覚えることがコロナ禍ではできていない。学校の中でマスクを外して顔が見える活動を工夫して考えていかなければいけない。小中学校の 1、2 年生は現状が当たり前の学校生活だと思っている。何かを元の状態に戻す際には助走が必要かと考える。

《荒川委員》

コロナ禍で市外、県外に出られないからこそ米子をしっかりと学んでほしい。良さを再発見するチャンスであり、ふるさとを知って視野を広げ、羽ばたく準備をするチャンスだと思っている。もう一つは、わくわくにつながる情報を届けてあげたい。遊具の整備や大山小麦のパンのことなど広く知らせてほしい。

《三瓶委員》

アフターコロナは難しい問題が山積みだと考えている。学校、家庭だけではなく、地域の方にも一緒に考えていただきたい。そのために、これから展開していくコミュニティスクールを上手く使うことができればと思う。米子は商業の街であり、コロナ禍の影響を受けた家庭も少なくない。福祉的な支援、課外活動や体験学習についてもコミュニティスクールで関わればと思う。

《上森委員》

教育委員会事務局を中心にコロナ対策をしっかりしていただいていることについて感謝を申し上げる。生徒達もしっかり感染対策に取り組んでおり、全生徒をほめてあげたい。休校時の対応等も全国に先駆けている事例があるにもかかわらず、市民に今一つ伝わっていない。市としても教育委員会事務局としても情報発信をしっかり行う必要がある。アフターコロナについては、子ども達も順応してくれると思うが、それまでの助走を後押ししてあげるのが大人の役目だと考えている。

《浦林教育長》

コロナ収束後の事を今考えておくことが重要。教育課程にプラスアルファをしていく工夫を是非お願いしたい。校長会でも情報共有を行い、良い事例は全市的に展開できればと思う。学校現場では精一杯やっただいただいているため、できる限りの力が子どもたちについているとは思いますが、私たちが気づかない点で子どもたちに欠けている要素があるのではないかと心配している。教育現場とは違った視点で助言がいただける様な機会がないか県教委とも連携して模索しているところ。補う部分があるのであれば、コロナが明けたあかつきには打って出たいと思っている。

《伊木市長》

いただいたご意見を基に、我々としても最大限バックアップさせていただく事をお約束したい。